

普通体基調の会話における丁寧体への スタイルシフト

佐藤 竜

1 はじめに

日本語には、待遇レベル^(注1)の上で明確に区別されるスタイルとして、丁寧体と普通体の対立がある。同一会話内では、原則として同じスタイルを維持することが期待されるが、実際の会話では、丁寧体と普通体を混在させる発話、すなわちスタイルシフトの使用が高頻度で見られる。それらのシフトは、心理的表現の伝達や談話の展開標識などの機能を持つと指摘されているが、本稿では前者の心理的機能に着目して考察する。

2 先行研究

宇佐美 (1995) は、談話内におけるスピーチレベルシフト^(注2)に着目することによって、談話レベルから見た敬語使用のメカニズムについて解明した。初対面でなされる大学生活や海外生活の談話に限定することで、ブラウン&レヴィンソン (1987) のフェイス侵害行為におけるフェイス・リスク^(注3)を構成する3要素である、「力関係」「社会的距離」「負荷度」のうち、後者2つを一定に保った状態で調査した。また、「目上」「対等」「目下」の対話者を男女別に割り当てることによって、力関係を大きく3段階に分類すると同時に、同性であるか異性であるかの違いについても着目した。

収集された談話を、心理的要因(ローカル要因)と社会的・文化的要因(グローバル要因・年齢、社会的地位、性など)の2側面から分析した結果、丁寧体から常体へのシフトでは、ローカルな要因がシフトを生じさせる直接的な原因になっているのに対して、グローバルな要因は、シフトの頻度を規定するという形で間接的に関与するのだと指摘した。ローカルな条件としては、①心的距離の短縮、②相手の n -レベル^(注4)に合わせる時、③ひとりごと、自問をする時、④確認のための質問、或いは、答えをする時、⑤中途終了型発話の時、の5つ

を挙げ、グローバルな影響としては、男女ともに目上や異性との談話において常体へのシフトが少ないことを明らかにした。

3 考察

一場面における待遇レベルの選択が会話のスタイルに影響を及ぼすことから、シフトが起きた箇所の前後における状況に着目していくわけだが、沈黙や同時発話などの言語以外の要素については省いて考察する。また、ある待遇表現が選択された要因を分析するに際しては、宇佐美（1995）と同様に、ブラウン&レヴィンソン（1987）のポライトネス理論^(注5)に基づき、「社会的距離」「力関係」「負荷度」の3要素を軸に据え考察する。ただし、3要素全てにおいて一切の条件設定を行わずに調査するという点では、宇佐美（1995）と異なる。この手法については、一定に保つ要素を設定しないことから、他の事例どうしを同一線上で比較できないという欠点が指摘できる。しかしその反面で、比較的自然的な日常会話の調査は可能となる。

3要素のうち、社会的距離は「親密／疎遠」、力関係は「上／対等／下」、負荷度は「高／低」といったレベルの設定を場面ごとにその都度行う。親疎関係からは心的距離の「拡大／縮小」を、上下関係からは敬意の「大／小」をそれぞれ求めることにより、スタイル選択の要因を探る。さらに、負荷度を会話参加者における外的要因「時間・金銭」と内的要因「気力・体力」とに細分化してレベル分けすることで、負荷度の概念を多様化し、基本的にどの場面においても負荷度の設定を可能にする。負荷度の高さは、基本的には一般的な知識に基づいて判断するが、話者の見なしが大きく関与する場合もある^(注6)。本稿では、前者を「実質的負荷度」、後者を「見なし負荷度」と名付けて考察に用いる。

また、待遇レベルの選択が迫られる場面では、フェイス・リスクが関与する。そして、聞き手に対するフェイス侵害行為として、ネガティブ・フェイス^(注7)では「依頼」、ポジティブ・フェイス^(注8)では「批判」がそれぞれ挙げられる（ブラウン&レヴィンソン、1987）。すなわち、シフトが起きる原因となった事柄としては、前者は話し手の問題であり、後者は聞き手の問題であると言える^(注9)。これを、事柄における「領域の問題」として、負荷度を設定する際に加味する。

上記に挙げた要素を総合的に踏まえて、どれがシフトを引き起こす要因としてより多くの比重を占めるかについて、それぞれの要素との関わり方から分析する。

3.1 聞き手の負荷度が基準となるシフト

本稿で用いる事例は、特に指示を出していない自然な会話例である。先にも述べた通り、場面や内容について一切の条件設定をせず、時間制限も設けず、話者の年代や性別についても指定していない。また、不自然な会話になる要素をなるべく排除するために、筆者の親族及び近親者、それから語学に従事する研究者や学生を、話者として選定していない。以下に出てくる、話し手と聞き手の位置付けは、話し手はシフトした側を指し、聞き手はシフトした言葉が向けられた人物を指す。

- (1) TT 先生これ、飲んでください。
YT おおー、いつもありがとう。
YT ごちそうさまです。

①場面：整骨院／②内容：差し入れに対する感謝。

③話し手・聞き手

TT：患者（男性）10代後半

YT：整骨院院長（男性）50代前半

・医者と患者という関係でありながら、10年弱の付き合いであるため、年齢を優先したスタイルが選ばれる。YTからTTへのスタイルは普通体であり、もともとTTもYTに対して普通体を用いていたが、年齢が上がるにつれ丁寧体を用いるようになった。

(1)の例では、缶コーヒーの購入という行為から、聞き手TTには金銭的及び時間的負荷が生じる。しかし、缶コーヒーの100円前後という金額について、さほど高い金額であるとは言えず、また購入すること自体は短時間で済む内容であるから、外的要因としての実質的負荷度は高い位置づけにはなりえない。気力や体力を要する作業ではないことから、内面的要因による負荷度も低いと考える。

両者の関係性としては、社会的距離は親密であり、力関係は話し手側が上であるから、これらの要素が高配慮な表現を引き出す要因になっているとは考えにくい。ただし、この一場面においては、物を譲渡する側とされる側とに分かれていることから、一時的に聞き手TTが上で話し手YTが下といった上下関係が形成されている。

一時的な上下関係が形成されたことによって、聞き手の負荷度を話し手側が

高く見積もることに繋がり、見なし負荷度が高くなる。それによって、敬意の高い丁寧体へとシフトがなされたのだと考えられる。

- (2) MS 8GB (ギガ) に入ればいいじゃん。
MS いい？
ES うん。
(ファイルをドラッグしてデータを移動する)
ES あ、そうやってやるんだ。
(メールにファイルを添付完了)
MS・ES きたー！
ES ありがとう！
ES 助かりました。

①場面：パソコン作業中／②内容：ファイル添付作業補助に対する感謝。

③話し手・聞き手

MS：大学生（男性）20代前半

ES：短大生（女性）20代前半

・同い年。互いに普通体を用いて会話する。

(2) について、パソコンのデータ添付作業は、決して長時間を要するものではないこと、また金銭面も関与しないことから、外的要因としての実質的負荷度は低い。内面的要因についても、肉体的労働ではないこと、それから複雑で面倒な作業ではないことから、体力面及び気力面での負荷度も低いと考える。

両者の関係性については、社会的距離は親密であり、この一場面においても変動はない。力関係は通常対等であるが、ここでは助ける側と助けられる側とに分かれていることから、一時的に聞き手 MS が上で話し手 ES が下という上下関係を形成している。さらに、MS には出来て ES には出来ないという能力差の問題が、力関係のさらなる拡大に繋がっている。

つまり、(2) も (1) と同様に、力関係の一時的拡大によって、見なし負荷度が高くなったことによるシフトであると言える。

- (3) HY 最後まで聴いてくの？
SA はい。
(パンフレットを取り出して HY に見せる)

SA これ、ここでも弾くんですよ。
HY あー。
HY 私はこの後用事があるんで、お先に失礼します。
SA あ、そうなんですか？
HY 私のぶんまで観てって。
SA わかりました。

①場面：コンサート会場にて休憩時間内の会話

②内容：コンサートホールを途中退席するという連絡。

③話し手・聞き手

HY：元フットサルチームコーチ（女性）30代前半

SA：教え子（男性）20代前半

・HYはSAが小学生時代に所属していたフットサルチームの元コーチ。

HYからSAへのスタイルは主に普通体が使用される。

(3)の場合、話し手HYが退席した後、聞き手SAは独りで時間を過ごすことになることから、気力面においては多少負荷度を高く設定する必要があるが、もともとは単独で訪れていたことを考慮すると、独りで聴く心構えがなかったとは言えないことから、さほど高い位置付けにはできない。時間（残りの公演時間）と金銭（チケット代）は、話し手が途中退席することとは関与しないため、シフトには影響しないものと考ええる。

両者の関係性については、社会的距離は親密であり、力関係は話し手HYが上であることから、ここからシフトが生じたとは考えにくい。また、話し手が社会的距離の拡大を図るような状況下でないことは明白であるし、先に帰る行為が一時的に上下関係を形成させるとは考えにくいことから、一時的な立場関係や上下関係の形成も考えにくい。

したがって、この事例については、領域の問題を見ていく必要がある。この事柄は、話し手の問題であることは間違いないのだが、シフトが起きる直前に「この後用事がある」と話していることから、話し手の問題でありながらも予定を変更することができない、つまり話し手自身にもどうにもできない事柄であると言える。そのため、話し手側は退席したくないのにならなければならないことから、自身の負荷度を高く設定することになる。結果として、SAを会場に独り残すことに対する見なし負荷度も高くなったことに繋がっていく。

- (4) AT AY 合格おめでとう。
 AY おー、あざーっす！
 TK AY 合格したの？

①場面：カラオケの一室にて／②内容：祝福の言葉に対するお礼。

③話し手・聞き手

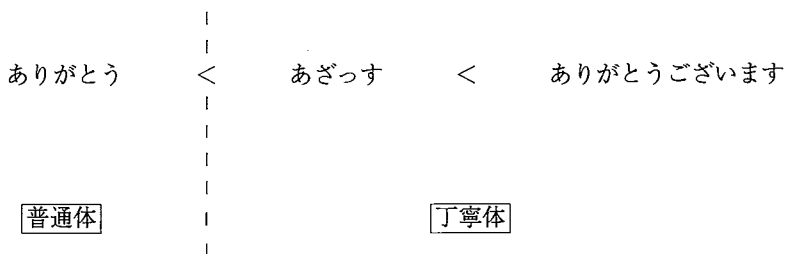
AT：大学生（男性）10代後半

AY：浪人生（男性）10代後半

TK：大学生（女性）10代後半

・3人は同い年。通常の会話では普通体が用いられる。

(4) の考察に入る前に、シフトとして取り上げた「あざーっす」を丁寧体として位置づけるべきか否かについて述べる必要がある。これは一見、乱雑な表現であるような印象を受けるが、「っす」が「です／ます」を崩した形であることから、形式的には丁寧体として位置づける（尾崎（2002）参照）。



祝福の言葉を述べるという行為自体には、内面的要因や外的要因といった負荷度は関与しないため、実質的負荷度は低いと言える。

両者の関係性における社会的距離は親密であり、ここでの一時的変動も見られない。また、力関係は対等であるが、ここでは「祝う側／祝われる側」として一時的に聞き手 AT が上で話し手 AY が下という上下関係を形成している。

上下関係の一時的形成によって負荷度の見積もりが高くなったために起きたシフトであるという面では、(1)～(3)と同様である。しかし、前の3例と異なる点は、同い年の同性の友人であることから、両者の社会的距離がより親密であることが指摘できる。したがって、親密度の高い間柄において、過度な改まった敬意はかえって不適切な印象を与える恐れがあるため、砕けた表現へ

と敬意レベルを下げる、つまり丁寧体の体裁を取りながらも不自然な敬体とならないように調節したのだと考えられる。

- (5) TS 何分のに乗るの？
SS 50分かな。
SS 58分でもいいんだけど、雨だから。
TS ……はい、到着。
SS ありがとうございます。
TS 気をつけてな。

①場面：TSがSSを駅まで車で送り届ける道中での車内

②内容：送迎に対する感謝。

③話し手・聞き手

TS：兄・大学生（男性）20代前半

SS：弟・高校生（男性）10代後半

・普段の会話はともに普通体。

(5)の例も、語尾の長音によって丁寧度が下げられている印象を受けるものの、形式としては丁寧体であることが確認できる。

外的要因としては、時間面では運転時間、金銭面ではガソリン代が考えられる。また、内面的要因も、車の運転という心身の負担を考慮し、比較的高く位置づけられる。

両者の関係性としては、社会的距離は親密であり、この場面での一時的変動もない。対して、力関係はもともと上下関係を築いていながら、さらに行為を「する側/される側」とに分かれることで、聞き手TSが上で話し手SSが下としてのその差は大きく広がっている。

これもまた、上下関係の拡大が負荷度の見積もりを高くさせた例であると言える。社会的距離についても、同性の兄弟であれば、(4)と同様もしくはそれ以上に親密度は高いと言えるが、この実例はもともとの実質的負荷度が高い状況であり、なおかつ本来の力関係にも差がありながら、それに拍車をかける形で一時的に上下関係が拡大したことによって、(4)の「あざーっす」に比べて砕けさせる度合いを制限したのもであると考えられる。

3.2 話し手の負荷度が基準となるシフト

- (6) KM 次行こうよ。
YK ほんとに行くの？
KM 行かないの？
YK 正直怖いんですけど。
KM 大丈夫だって！

①場面：某レジャー遊園地施設にて

②内容：体験型アトラクションへの勧誘に対する断り。

③話し手・聞き手

KM：大学生（男性）10代後半

YK：大学生（男性）10代後半

・高校時代のクラスメイト。互いに普通体を使用。

(6) では、話し手 YK が消極的な態度であることは、前後の文脈からも明白であるため、気力がない＝気力を要するという理屈から、内面的要因による負荷度はかなり高めであると判断する。時間もアトラクションの待ち時間及び体験中も含めた所要時間を考慮すると、外的要因による負荷度もまた、高いと言える。

両者の関係性としては、社会的距離は親密であり、力関係も対等である。しかし、意見の対立という状況から、疎遠な関係が一時的に形成されている。

この場合は、負荷度が話し手自身におけるものであるから、見なしが存在しない。負荷度を正確に高いと判断したうえで、疎遠な関係が形成されている。つまり、(1)～(5)の、「上下関係の拡大が聞き手の負荷度の見積もりを高くする」ではなく、「話し手の負荷度の高さが疎遠な関係を形成する^(注10)」状況になっていると言える。

したがって、(1)～(5)で表現された、聞き手に対する配慮から生まれた敬意とは異なり、心的距離の拡大、つまり一時的に親しい間柄ではない状態になることで、丁寧体へとシフトしたものであると考えられる。

- (7) NK スキーウェアは私物でよろしいのでしょうか？
MS スキーウェアは指導者全員私物です。
NK わかりました。

①場面：スキー教室指導ミーティング

②内容：質問に対する返答。ただし、以前に連絡を受けている事項である。

③話し手・聞き手

NK：スキーインストラクター（男性）10代後半

MS：スキー教室代表者（男性）40代後半

・シフト前後の会話を省略しているため分かりにくくなっているが、上司と部下との関係上、MSからNKに対するスタイルは普通体。

(7)においては、説明という行為自体に、時間や金銭、また体力を要することではないが、以前にも話した内容と同様の説明をしなければならないということから、話し手MSの気力面における負荷度はかなり高く設定できる。

両者の関係性としては、同団体のインストラクターであることから、社会的距離は親密でも疎遠でもなく、ちょうど中間に位置すると言える。力関係は、話し手MSが上であり、またこの一場面においても変動はないことから、シフトへの関与は考えにくい。

したがって、この事例も(6)と同様に、話し手側による負荷度の高さが社会的距離を拡大させたことによって、一時的に疎遠な関係が形成されたためにシフトしたと考える。

4 まとめ

以上の考察から、普通体基調の会話において丁寧体へのシフトが起きる条件としては、大きく分けて、①聞き手側の負荷度が高い場合、②話し手側の負荷度が高い場合、の2つに分類できた。①は、実質的負荷度が単に高い場合はもちろん、他にも負荷度の押し上げや見なし負荷度の高さなどによる要因も挙げられた。また、親疎関係において親密な間柄である場合においては、丁寧体という形式上の体裁をとりながらも、表現の簡略化や長音によって丁寧度を下げて調整するという現象も見られた。②は、話し手側による負荷度の高さが、不安感や怒りの感情をもとにした心的距離の拡大、つまり疎遠な関係の形成に繋がっていることが指摘できた。

宇佐美(1995)は、力関係がシフトに与える影響について着目し、ローカルやグローバルといった要因が関与することを述べたが、本稿では社会的距離や負荷度にも着目したうえで、負荷度及び見なし負荷度の高さがシフトを引き起

こす最も大きな要因であると結論付ける。そして、負荷度を設定するための要素として、社会的距離や力関係が間接的に関与しているのだと考える。

今後の課題としては、感謝を伝える表現「ありがとう／ありがとうございます」とシフトの関係について、本稿での(1)や(2)の同一会話内において、「ごちそうさまです」や「助かりました」といった感謝表現にはシフトが起きている一方で、同じく感謝を表す「ありがとう」にはシフトが見られないこと、それから丁寧体として現れた(4)や(5)において、いずれも「ありがとうございます」を砕けさせた形しか収集データには現れていないことから、「ありがとう」という語に丁寧度を持たせることは難しいということなのか、単にデータ不足であるのかについても、引き続き収集に努めていく。

次に、シフトにおける「隣接ペア^(注11)」など定型句の位置付けだが、(4)の実例では、「おめでとう」に対する「ありがとう」にシフトが起きている。これは、お礼の形式を取る「隣接ペア」として機能していることから、一種の定型句であるとの指摘もできる。つまり、話し手はあくまで形式通り述べたのであって、これをシフトとして位置付けるべきではないかについて検討していく。

最後に、丁寧体における「丁寧語」と「尊敬語／謙譲語」の待遇レベルの差についてだが、丁寧体は、単なる「丁寧語」と、敬意としては最上級に位置付けられる「尊敬語／謙譲語」に分類できるが、丁寧語の発話に現れる尊敬語や謙譲語についても、丁寧度が変わることからシフトとして位置付けるべきか、また普通体から丁寧語にシフトする現象と、同じく普通体からいきなり尊敬語や謙譲語にシフトする現象とでは、そこにシフトとしての差はあるのかについて、丁寧体の待遇レベルを2種類に分類し、今後考察していこうと思っている。

参考文献

- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法7』くろしお出版
滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』研究社
Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*.
Cambridge University Press.
宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『學苑』662 27-42 昭和女子大学光葉会
宇佐美まゆみ (2015) 「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』18 (1) : 7-22
生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12 (12) : 77-84
大修館書店

- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』
第 I 部門 (人文科学) 42 (1): 39-51
- 尾崎喜光 (2002) 「新しい丁寧語「(っ)す」」『男性のことば・職場編』現代日本語研究会編ひつじ書房 pp.89-98

注

- 注 1 事態を述べる際、相手に配慮して使い分ける表現のことを待遇表現と言う。そして、そのレベルを待遇レベルと言う。待遇レベルの選択に関わる要素としては、「上下関係」「親疎関係」「公的／私的」といった場面差が挙げられる。
- 注 2 スタイルの切り替えを指す用語は研究者によって異なる。ここでは、スピーチレベルシフトとスタイルシフトは同義として扱う。
- 注 3 フェイスは、他者に認められたい、邪魔されたくない等、基本的欲求のこと。それらを脅かす可能性をフェイス・リスクと言う。
- 注 4 宇佐美 (1995) は、丁寧体を基準とした場合の敬意の低さを表す単位として、普通体を－レベルと位置付けている。
- 注 5 社会的な人間関係の中で「どう振る舞い合うか」、また人間関係の表現や変更のために「言葉を用いて何をなすか」の理論。
- 注 6 会話のポライトネスを決定づけるに際して、^{*}現実、のありようがそのまま反映されるとは限らず、話し手がそうであればいいと願い、おそらく聞き手も同意してくれるであろうという、^{*}見なす、ありようが表現される (滝浦、2008)。
- 注 7 ネガティブ・フェイス＝他者に邪魔されたくない・踏み込まれたくないという欲求。
- 注 8 ポジティブ・フェイス＝他者に受け入れられたい・よく思われたいという欲求。
- 注 9 「依頼」の場合は話し手から投げかける事柄であり、「批判」の場合は聞き手のありようが話し手を不快にさせた要因などがある。
- 注 10 社会的距離が親密な関係においては、話し手にとっての負荷度が高い場合でも許容するべきであるという認識が存在する。許容できない場合には、先述した認識を覆す必要性が生じるため、疎遠な関係に変えなければならない。つまり、負荷度が高いことがシフトに直結するのではなく、心的距離の拡大を経由してからシフトする。
- 注 11 2つの発話からなる、連続して行われる依存関係にある発話どうしのこと。「質問」と「答え」や、「挨拶」と「挨拶」等。